

段ボールの食券で配給 ■ ラジオ体操

避難所に自治会 広がる

大震災と原発事故で、福島県では県内だけで8万を超す人が避難生活を続ける。不便な生活が長引くなか、避難所で自治会を立ち上げる動きが起きている。「仮暮らし」を連帯

して乗り切ろうとしている。「食事の時間でーす」。福島市の避難所、福島県立福島北高校体育館。お昼になると、志賀勝彦さん(64)の声が響いた。



手作りの食券(手前)を受け取る住民たち。食券には家族ごとに名前や人数が書かれている＝福島市、矢崎写す

震災から数日後、志賀さんたちが避難してきた頃は、食料や服などが配布されると、われ先に取ろうとする人が目立った。しかも、ごみの片付けといった仕事は、いつも同じ人ばかりが担う。そんな状態を見かねた有志が集まり、志賀さんを会長として、自治組織「福島北ガンパロー会」を20日に立ち上げた。

志賀さんたちはまず、一般の自治会に似た「班分け」をした。避難者を二つの班に分け、各班でそれぞれ5人の世話役を決めた。まとめ役の会長や

副会長、世話役たちは毎日打ち合わせを重ね、住民の要望

や連絡事項をまとめた。各班で掃除や炊事も分担する。

県立福島工業高校(福島市)内の避難所でも、約110人の避難者が3班に分かれて自治組織をつくった。食事、トイレ掃除、ごみ処理などを担当がこなす。

食料を配布する際の行列を防いで平等に配るため、段ボール紙で食券も作った。券は班ごとに色分けされ、家族の人数や代表者名を明記。班長たちが各家族に配っている。

約180人が避難している同県二本松市の岳下住民センターでは毎朝、ラジオ体操が行われている。避難者で、浪江町体育指導委員長の川崎豊さん(60)が音頭をとり、町職員やボランティアも協力。ほぼ全員が参加しているという。地震直後、たばこのポイ捨てなどが目立った。川崎さんは「お世話になっている二本松市に申し訳ない。恥ずかしい行動をしよう」と自治会をまとめた。(矢崎慶一)